

優秀賞  
ゆうしゅうしょう

高校生区分  
こうこうせいくぶん

みんなちがって、みんないい

おきなわけんりつおろくこうとうがっこう  
沖縄県立小禄高等学校 二年

とけし  
渡慶次 梨乃

わたし  
私が小・中学生のときの友達の話です。

かのじょ  
彼女は支援学級の子でした。初めて会ったのは小学校一年生の時です。彼女はいつも笑っていて、元氣でお喋りが大好き

こ  
な子でした。私と私の親友は彼女のことを大好きで、彼女が

しえんがっきゅう  
支援学級から帰ってきた時や登下校など、三人でいることが多

かったです。小学校低学年のころは彼女の障害に気付いてい

なくて、みんなで仲良く普通に過ごしていました。ですが学年が

あ  
上がっていくにつれて、彼女と私たちの違いが良く見えてくるようになりました。

たと  
例えば、授業の内容や進み方が違っていたり、喋り方が違っていたりと、他にも私たちと違っていたのです。

か  
それからみんなは、彼女を遠ざけるようになりました。私も、そのうちの一人です。ですが、今までと変わらず仲良く過ごしていました。

わたし  
私の通っていた小学校は私が五年生になる時に、違う小学校と合併しました。

しょうがっこう  
小学校四年生までは私たちの学年は一クラスしかなく、みんな同じクラスだったため、男女みんな仲良かったです。しかし、合併してからクラスが二クラスに増え、みんなバラバラになりました。

ですが、私と私の親友と彼女は同じクラスでした。

当時そのクラスの担任だった先生に聞いた話によると、私

たち二人で彼女を支えてほしいという三・四年生の時の担任の

先生の想いだったそうです。この時、私はとても嬉しかったで

す。なぜなら、彼女を支えることができていて、私たち二人も、

彼女のことを大好きだったからです。もちろん、私たちはずつ

と一緒にいました。

六年生になって、私の親友はクラスが離れましたが、彼女と

私は同じクラスになりました。

六年生が始まってすぐのことでした。ある日を境に私は少

し彼女を同情するように接してしまふようになりました。それ

は、体力テストの測定の時のことです。

二人一組でペアを作つて反復横跳びの測定をした時のことで

す。私は彼女とペアを組み測定をしていました。私が測定し終

わり、回数を聞くと、五年生までの記録を大幅に下回っていま

した。でも、数を数えるだけだから彼女が間違えるはずがない

と思つていました。しかし、当時の担任が念のため数を教えて

いたらしく数が全く違ふと指摘されたのです。学年が上がるに

つれ薄々気付いていましたが、私たちが彼女はこんなにも違ふ

のか、と動揺してしまいました。それから私は、彼女は障害者

なんだ。優しく接しなければ。と同情するようになってしま

ました。私もまだ未熟だったため、同情することで傷つけて

しまふと考えることができませんでした。同情する気持ちの

まま、私たちは小学校を卒業しました。

中学校に入学し、彼女とはまた同じクラスになりました。

正直、すごく不安でした。彼女は私たちとは違ふ。みんなに

どう思われるのだろうか。

その不安は見事の中にしてしまいました。

彼女は一年生が始まってからすぐに、ある女子生徒のスカートを大きくめくってしまったのです。彼女はふざけてやったことなのでしょう。しかし、女子生徒は激怒。もちろん、女子生徒と一緒にいた子もそれを見ていた子もみんな彼女を変な目で見ようになったのです。

その時、私はやって良い事といけない事があるだろうと強く叱ってしまいました。

そんな事があってから、私は彼女と過ごすことはなくなりました。今思えば、彼女を少し避けていたのでしよう。一緒にいたら私も変わった人と思われる。そう思ってしまったからです。一緒にいる事がなくなり、そのまま一年生が終わりました。

二年生になり、彼女は東京に引越しました。彼女が引越

して少し経った頃、同じ小学校だった子に、あなたは彼女に対して優しくしてたよね。ずっと一緒にいて、お世話係りをしてたよね。と言われたのです。きっとその子は私がお利口だと言いたかったのでしょう。当時、私はその言葉にすぐ腹が立ちました。なぜなら、その言葉は彼女を侮辱しているように聞こえたからです。ですが、実際に私も彼女を避けてしまっていたから、腹が立つなんて言えませんでした。

彼女がみんなより違った。みんなより心と頭の成長が遅れていた。ただそれだけなのに、私たちは彼女を支えてあげることができませんでした。私はあの日彼女を避けてしまったことをすごく後悔しました。その時、私は小学校の時に習ったあの詩を思い出しました。詩人の金子みすゞさんが書いた「私と

小鳥と鈴と」という詩です。この詩は私と小鳥と鈴のそれぞれの特色について書かれています。その詩の最後の詩句に「みんなちがって、みんないい」という文があります。この一節が強烈に蘇りました。

確かに彼女は私たちとは違い、障害を持っています。ですが彼女は誰よりも明るく、誰よりも頑張り屋でした。みんな違う、だからこそ自分の価値観を共有し合うこともできるし、支え合う事もできます。そんな当たり前のことを教えてくれたのは彼女でした。

私の人生の中で、彼女は大きな影響を与えてくれました。そんな彼女にとっても感謝しています。今でも彼女は私の大好きで大切な友達です。